

原始仏教に於ける滅の問題

羽 矢 辰 夫

はじめに

滅とは種々の言葉の訳語であり、多くの場合悟りと関連付けられて、原始仏教のみならず仏教全体を通じて非常に重要な言葉の一つとなっている。以下はそのような言語上の細かい問題ではない。又、教義上の問題を扱ったものでもない。滅という言葉の周辺に存在する問題のより本質的と思われる部分を、特に釈尊の思想という面から若干の考察を加えたものである。先ず、筆者は滅を便宜上、(1) 人為的滅、(2) 自然的滅、との二種類に分類した。これによって滅の持つ二面性を認識し、更に両者を比較することによって釈尊の思想の一端に触れようという意図からである。

(1) 人為的滅

原始仏教で滅といえは、すぐに思い浮かぶのは四聖諦即ち苦集滅道の滅である。この滅は従来苦が消滅してなくなるということを意味していると解釈されてきた。ところが、中村元博士は『原始仏教の思想』下、15頁～16頁、に於いて、この場合の滅の原語 *nirodha* が元来「制止」の意味であること、インド一般では「心や感官を制しておさめる」こと、「ほしいままの欲望を制御し、苦しみをとじこめてしまうのがもとの意味」であることを明らかにしている。中村博士は、特に滅を理想の境地と考えた時の意味の誤差の大きさ、即ち、理想の境地を何もなくなった状態と理解することから仏教を虚無的にしてしまうことへの反省に焦点を置かれているようであるが、それに関連して、単に四諦説に於いて滅を心や感官を制止して苦を閉じこめてしまうというように解釈している点だけを把えてみても、従来までの消滅してなくなってしまうと解釈されていたものと比較すると、かなり異なった解釈であると思われる。

しかしながら、ある点から考えるとこの二つの解釈には大した違いはないと筆者は考える。どういふ点でそのように考えるかと言うと、苦が消滅してなくなってしまうにしても苦を閉じこめるにしても、いずれも人為的力によって消滅した

り閉じこめられたりしているからである。又、消滅させるべき苦、閉じこめるべき苦という判断が先にあって、それから人為的力が関与してくる。その結果、苦は消滅してなくなったり(消滅せしめられてなくなる)閉じこめられたりする訳である。これらの点から、先の二つの解釈は大した違いはないと考えるのである。

十二縁起説にしても、矢張り生老死の苦を滅すべしとの判断が先にあり、それを滅する為に苦の原因を渴愛及び無明に求め、それらの原因を滅して初めて生老死の苦を滅することが出来るという思想によって成立したものと考えられる。四諦説はそれを簡単に原因結果の関係として把え、特に苦を滅する為の方法即ち八正道を強調しているに過ぎない。

生は尽きた云々の所謂解脱の表明とされている定型句も、苦と判断された生死輪廻を断じ尽くしたということで、苦と深い関係にある。煩惱を断ずということも、結局苦をもたらず原因の一つと考えられるものを断じ尽くすということである。こうしてみると人為的滅とは主に苦という価値判断と深い結びつきがあることが判る。苦であると判断されたものはそのまま滅すべきものであり、その滅の為に人為的力を要するのである。この滅がなくなってしまうの意味でも閉じこめてしまうの意味でも大した違いはないであろう。

ここで苦ということについて言及してみたいと思う。一体、あるものを苦として把え、それを滅すべきであると考えるのは一つの価値観、教義であり、客観的な事実の認識とは言えない。『スッタニパータ』762に於いて「世間の人が楽と見るものを苦と見、苦と見るものを楽と見る」と言われているように、苦とは相対化され得るものである。釈尊は世間と争わないことを標榜していたと言われるが、もし自らの価値観を絶対であると考えたとするならば、たとえ釈尊自身に他人と争う積りはなかったとしても、又、表面的には争っていないにしても、実質的には世間と争っていたことになるのではないだろうか。多くの沙門バラモン達が各々の価値観信条によって論争している有様を冷静な眼で見つめ、各々の主張する真理の相対性を認識していた釈尊が、同じレベルで自らの価値観だけを絶対であると考えた筈はないと思う。従って、釈尊の言動の背景には何かしら彼らとは異なったもの、個人の価値観を超えたものがあつたに違いない。そうでなければ、即ちあるものを苦と見てその滅の為に努力するというのであれば、何ら他の沙門バラモンと変わりのないものになってしまう。それでは釈尊のブツダたる意義は失われてしまうことになるであろう。

勿論、解脱とか涅槃で表わされる究極の境地を最上とするからには、釈尊自身

の価値観が最優先していることは確かなのであり、それは相対化を免れ得ないのではあるが、他の沙門バラモンと同次元に位置しないことを公言し、更にはブツダたることを公言するからには、その背景には必ずや何か個人の価値観を超えたものがあつたのではないかと思うのである。少なくとも、超えたという自信の持てる何かがあつた筈である。

こうしてみると、苦に関するものは釈尊とは直接的には関わっていないのではないかという疑問が生じてくる。これまで仏教は苦を最大の眼目としてきた。苦の解決が最重要項目であつた。確かに宗教としての仏教はそうであつたかもしれない。我々凡夫にとっての仏教はそうでなければならぬのかもしれない。しかし、釈尊自身にとってはどうだったのであろうか。敢えて言わせてもらえれば、釈尊にとって苦とはあまり比重の大きな問題ではなかつたと言つてもよいのではないだろうか。

(2) 自然的滅

個人の価値観を超えたものとは何であろうか。それは事実である。どんな事実かといえば、我々は生じ滅するものであるという事実である。特に滅の面に関して、筆者はこれを自然的滅と表現したいと思う。それともう一つ、生滅の事実と我々との関わり合いについての事実である。我々が生じ滅するものであるということは、他の沙門バラモン達も少なからず言及していることである。そういう意味では、別に取り立てて言うべき程のものでもないかもしれない。それだけにこれは誰にでも理解出来るものでもある筈である。ところが、この生滅の事実に対して如何に対処するかとなると事情は異なってくる。他の沙門バラモンは、各自が各々思いのままに解釈し合い、論じ合つてしまつている。生滅という事実に於いては平等であるのに、その解釈となると実に多様である。何故なら誰もその理由を知らないからである。即ち、無知なのである。彼らは知らないことを知らず、知らないことに関して論じているのである。

釈尊も生滅という事実に於いては他の沙門バラモンと平等の立場にあつたといえるであろう。しかし、釈尊はこの事実をそのまま受け入れたのである。何の解釈も加えることはなかつた。無知であることを知つていたのである。これが如実知見というべきものである。知つていることを知つており、知らないことを知らないと知る。これが生滅の事実に対して適用された時に、釈尊のブツダたる証しとなつたのではないだろうか。我々は生滅するという事実は知つている。

しかし、何故そうであるのかは追究していない。解釈を加えることは如実知見に反するからである。この生滅の事実の認識とそれに対する我々の態度とその結果の認識、これこそが釈尊の根本認識であり、この背景があつてこそ、釈尊自身の価値観が独善に至らずに済んだと言えるであろう。

釈尊は生滅を唯だ観察することを説いた。生滅の事実が説かれている部分には anupassati という言葉がよく用いられている。随見とでも訳すのであろうか、くり返しよく見ることが強調されているようである。先程も述べたように、何故に生滅するのかということは追究されていない。突然の如く、唯だ生滅を観察すべきであるということが説かれているのである。思うに、それだけで人々の中には理解出来た者も恐らくはいたのであろう。生滅それ自体は勿論であるが、それと我々との関わり合い(どのように関わるのがよいか、悪いかということ)も理解出来たのではないだろうか。それを理解出来ない者が、生滅の根拠を追究しようとするのである。縁起故に生滅(無常)という説があるが、これは生滅の根拠を追究しようとするものであり、この場合の縁起がどのようなものであれ、正に如実知見に反するものであると言わねばならないであろう。

釈尊はこのように自然的滅、即ち、生滅の事実を根本認識とし、乃至、それと我々との関わり合いをも深く認識し、それを基盤とした上で、生滅の事実に従う生き方、それを自分勝手に解釈しない生き方を最善とし、それによって生じる寂静の境地を最高の境地としたのである。その上で、これに反する諸要素に対しては、人為的滅の領域で人的力によって排斥するように説いたのである。それが我々凡夫の立場では人為的滅の方を重要視せざるを得ない状況というものがあつて、結局は人為的滅によって得られる境地を最高の境地と考えるようになり、後は周知の如くの結果となつているのである。

お わ り に

以上、滅を人為的滅と自然的滅とに分けてそれに伴う問題を述べてきた。最後に筆者が言いたいことは、仏教という宗教ならいざ知らず、釈尊の思想ということであれば、人為的滅の問題よりも自然的滅の問題の方がより重要視されてもよいのではないかということなのである。

(東京大学大学院)